

豊白縁耕

NO. 7 1 西畑亮一

東北地方太平洋沖地震（政府は閣議で「東日本大震災」と命名）について、その被害が甚大であることを受け、大手マスコミ各社

の報道からは、「想定外」ということばがよく聴かれます。それは、政府関係者や各専門家、そして東京電力の担当者から聴こえてきます。直接に被害を被っている当事者の地域住民が発することばではなく、事態とその收拾策の説明を求められる側が「想定外」ということばを使っています。そのように求められる立場とは、普段、その権力や権威で、またその経済力で、地域住民や一般市民をして統治や管理をしたり、地域で社会サービスを独占供給している側です。

それらの文脈から想定すれば、「想定外」だったから為す術はなかった、人間の努力は及ばず私たちに責任はありません、と暗に語っているわ

けです。ほんとうにそうでしょうか。では、いったい何を予め想定していたのでしょうか。危機は、いつもそんな「想定外」からやって来るんです。特に被災で事故の原因については、実際にどうなるのか実験して確かめることもできないくらい危なく想定不可能なんですから。地震は、私たちが今回初めて経験する天災ではありません。具体的に数値を出して説明がありますが、そのような程度の問題ではないのです。例えば、津波の高さを3mと予測していたがそれを超える10mだったから、と。しかし、これは範囲の問題です。経験がないとその範囲に括れませんが、私たちはこれまで、幾度地震の被害を被ってきたでしょうか。

3月23日付、土木学会と地盤工学会と日本都市計画学会の各会長名での共同緊急声明では、「われわれが想定外という言葉を使うとき、専門家としての言い訳や弁解であってはならない」と述べられています。換言すれば、「想定外」ということばは自己保身のために「言い訳や弁解」に使われている、ということです。国語辞典を紐解けば、想定とは「ある状況を仮定して、考え定めること」と書いてあります。そして、それには程度と範囲を考えねばならないでしょう。「想定外」ということばの使用には、明らかに程度と範囲という2つの概念の意図的な混同が含まれています。原子力発電所の建物や機械装置等々、私たち人間の作った物が地震に限らず壊れない保証があるのでしょうか。壊れたり不調であったりするのが当たり前です。このことは、想定内のことであって、けっして「想定外」ではありません。

原発の事故後、状況と対応策につき責任ある説明をすべき人たちは、適正な情報をそれが必要な人のためにわかりやすく説いているのではありません。責任当事者でありながら、できるだけ自らには責任が及ばないように被害当事者らに聴こえるよう語っているのです。それは、その場しのぎで都合よく情報を操作し、壊滅的な状態を損害は軽微なりと知らせるかつての「大本営発表」と酷似してはいないでしょうか。つまり、ここで「想定外」とは、「都合の悪いことは、想定の外（そと）にしたい。ほんとうのことは想定さえしたくない」と言ってるんです。公共的な事業から莫大な私益を生み出す推進派でも、ほんとうのことを考えると原子力発電はやれない、ということでしょう。

